

研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名 富山短期大学 幼児教育学科 1年
- ・所属ゼミ ロカケン明柴ゼミ
- ・指導教員 明柴聰史
- ・代表学生 浅島舞美
- ・参加学生 阿部すず乃 小永井晴美 坂木美音 佐藤百華 椎名梨夏
高倉里奈 宝田彩耶 田原美咲 吉川綾香 渡辺菜月
土井蒼真 得能光 中村萌乃 松浦凜紗 若林亜美

【研究題目】障害児(者)施設で働く保育士の専門性についての研究 —施設の認識を高めることを目指して—

1. 課題解決策の要約

当初私たちは、障害児、障害者施設で働く保育士についてほとんど知らなかった。講義を受けた印象では、対象者への援助・支援、保育・生活時間、保護者への支援、多職種との連携、他機関との協働などが複雑であることから、数多くの専門性、技術・知識が求められているのではないかと考えていた。

しかし、フィールドワーク研究で施設を訪れると保育所保育士と同じような視点、保育技術(手遊びや制作、レクレーションなど)が用いられる場面を多く観察することが出来、施設で働く保育士の専門性は特別なことではなく、多様な保育実践の在り方の一つであることを学んだ。

そして、今回の調査結果から専門性の基礎となり、専門性を養うために最も重要なことは一人ひとりに寄り添い、思いやりの心を持つことだと分かった。

保育士をめざす私たちは、大学での講義等からの技術や知識の学びだけでなく、日々の生活の中から自己を見つめ、人とつながり、学びへの意欲を高める探求心を持つ人間性を磨き続けていかなければならない。このことを踏まえ、施設で働く保育士の専門性や施設の現状を身近なところから発信していく。

2. 調査研究の目的

【研究にいたる動機】

私たちが日々保育の勉強をする中で、保育士資格取得のためには実習経験を積まなければならないことは知っていた。しかし、その実習先の一つとして、障害児や障害者を対象とした施設(以下、障害児(者)施設)での実習があることは知らなかった。そのため施設についてあまり知識を持ち合わせておらず、施設実習に対しての不安を募らせていた。

児童家庭福祉や社会的養護の講義をうけて施設について、少しはイメージすることができ知識としては得ることができた。しかし、まだまだ知らないことが沢山あると思い私たち自身も自分たちが実際に見て、聴いて、学び、施設について調べてみたいと思い、この研究を行おうと考えた。

【本研究の目的】

保育実習の対象であり、保育士資格を取得することにより働くことができる障害児や障害者を対象とした施設で働く保育士を対象に調査を行い、

- ① 障害児(者)施設で働く保育士の専門性とは何か理解する
- ② 障害児(者)施設の保育士の役割についてフィールドワークを通して、見て、聴いて、感じて、考えて、話し合っ、学び、施設のことを理解し連携できる保育士、障害のある子どもへの保育や大人への援助・支援について、少しは語ることできる“強み”を持った保育士になることをめざす

ことである。そして、自分たちの実習の不安を減らし、実習や就職の準備へとつなげることで、施設のことを知らない同世代の人たちや、これから保育士をめざす人たちに発信し、知るきっかけをつくることとした。

3. 調査研究の内容

【障害児(者)施設で働く保育士の現状】

ここ数年、保育士不足がメディアで取り上げられている。「少子化なのに、保育士不足。なぜだろう。」という矛盾があった。保育士養成の授業の中で、子育てを取り巻く環境の変化、女性の社会進出による共働きの核家族が増えた事により、低年齢児を預ける家庭が増えている現状や多様な働き方のニーズに合わせた保育サービスメニューの多様化などが理由にあることが分かった。

そして、そのような保育士不足の現状は、保育所等の乳幼児を対象とする施設だけでなく、障害のある子どもや大人の施設であっても不足しているということを講義から知った。

【調査研究の内容】

- ① フィールドワーク及び実地体験を通しての参与観察
- ② インタビュー調査
- ③ 施設で働く保育士、施設長等を対象としたアンケート調査
- ④ 文献や先行研究による調査
- ⑤ ①～④をまとめ、問題解決に向けた提言と自己評価

(1) 対象者：障害児(者)施設で働く保育士(回収/配布：170/227[人]、回収率 74%)

本研究の調査対象施設は、本学の保育実習 I-2 の実習協力園を基に依頼。現在の富山県内の設置数も含めて、社会福祉法人富山県社会福祉協議会のホームページを参考に、以下の表にまとめた。

表 1 調査対象施設の概要

施設種別	入所・通所の別	年齢	調査協力施設 ／県内施設数
福祉型障害児入所施設	入所施設	児童	2/2
医療型障害児入所施設		児童	2/2
発達支援医療機関		児童・大人	1/2
福祉型児童発達支援センター	通所施設	児童	4/5
医療型児童発達支援センター		児童	2/2
障害者支援施設	入所施設	大人	3/27

※障害者支援施設は、本学の実習協力園であり、メンバーの居住地から行きやすい施設を選択した。

(2) 調査方法：

① インタビューガイドを用いた半構造化面接をグループで実施する。

② 対象者の勤務している施設で参与観察を実施する。

事前準備：事前準備として以下の事を行った。

① インタビューガイドの作成：施設で働く保育士に関して、学生各々が疑問に思った意見を出し合い、教員の助言を得て項目を設定し、インタビューガイドを作成した。

対象者への説明と同意：保育士に対し、調査目的、方法について同意を得た後、再度インタビュー当日に以下の内容を文書と口頭で説明し、同意を得た上で実施した。

i. 基本事項についてのアンケート調査：対象者の属性（年齢・性別・現在の職場での勤務年数・保育士としての通算勤務年数等）

ii. 面接による調査内容：他職種間の連携、年間行事、防災訓練の実施、実習生に望むこと

iii. 研究参加への自由性：研究への協力は任意であり、不参加であっても不利益は生じないこと、匿名性の確保を図ることを文書及び口頭で説明

② 観察項目の作成：幼稚園での観察・参加実習の経験から、乳幼児施設と障害児(者)施設の物理的な環境や日々の活動の特徴・特性、障害児(者)施設の保育士の専門性を明確にするための観察項目を作成した。

(3) 分析(考察)方法：参与観察の結果、インタビュー調査の結果、アンケート調査の自由記述については、項目を分類し、グラウンデッド・セオリーの手法を参考に、障害児(者)施設で働く保育士の専門性について分析(考察)を行った。

(4) 倫理的配慮：本データは、本研究でのみ使用することを対象者に対し、事前に同意を得て行った。

4. 調査研究の成果

フィールドワークでの参与観察調査から気づいたことについて、“保育士の専門性”と“物理的な配慮や環境”に分けて以下の表にまとめた。

表2 施設を観察して気づいた特徴

障害児(者)施設の特徴で気づいたこと	
保育士の専門性	<ul style="list-style-type: none">・一人ひとりの食事や当日の予定を写真で示してあり、視覚的にわかりやすい工夫がされている。・音楽による聴覚や体に触れたりする触覚など、五感に働きかける活動が多い。・筋肉が固まらないように、マッサージなどを行っている。・食事の際、集中して食べられるように、仕切りを用い、刺激を少なくして一人で食べる場合がある。・行事を大切にしており、日常生活の中で新しい刺激を楽しむことが出来る工夫がされている。・言葉だけでなく、身体でのコミュニケーションを多く用いて伝えている。・自立に向けての活動の種類が多く、障害の状態に応じた訓練・活動・作業がある。
物理的な配慮 ・環境	<ul style="list-style-type: none">・生活の介助が多いため、浴室やトイレの設備が充実している。・施設の廊下は車いすが通ることを想定されており広い。・利用者の視線に合わせ、天井に掲示物やイラスト付きのカードが貼ってある。・障害の程度によって部屋や環境が分かれている。・トイレやお風呂場は様々な障害に対応できるよう、特別な機能がある。

	<ul style="list-style-type: none"> ・転落防止のため高い柵のベッドがある。 ・安全確保のため、施設内の扉の多くが施錠されている。 ・いすや机にシールが貼ってあり、視覚的にわかりやすくしてある。 ・利用者がストレスを発散させることのできる場所があり、気持ちのコントロールができるような工夫がされている。
--	---

表3 施設を観察して気付いた保育施設との違い

保育施設との違いで気づいたこと	
保育士の専門性	<ul style="list-style-type: none"> ・医師、看護師、各療法士、栄養士など多職種との連携がある。 ・医師等と入所児童の体調について話し合いをしている。 ・表情や身体の小さな反応を見逃さないように観察している。 ・避難・防災訓練の際、どの職員が何をするか役割分担が明確にしてある。 ・保護者に対しての支援が手厚く、障害を抱える家族を持つ不安を和らげることや、子育てに自信が持てるような支援をしている。 ・一人ひとりの人権、人格や尊厳を守るため、呼び方に注意している。 ・(洗濯や調理など)自立を促す活動がある。
物理的な配慮 ・環境	<ul style="list-style-type: none"> ・宿直や夜勤がある。 ・建物が大きく広い。バリアフリーであり、エレベーター(人物用・給食用)がある。 ・地域とのつながりが深く、連携して行う行事などを大切にしている。 ・施設内の装飾をその季節に合わせたものに配慮している。 ・交通の便の悪い立地が多い。

アンケート調査の結果からは、以下のことがわかった。

- ・障害児(者)施設で働く保育士は、女性保育士が9割を超えている(Q1より)
- ・施設での平均勤続年数は、8.4年であり、全国の保育士平均より高かった(Q3より)

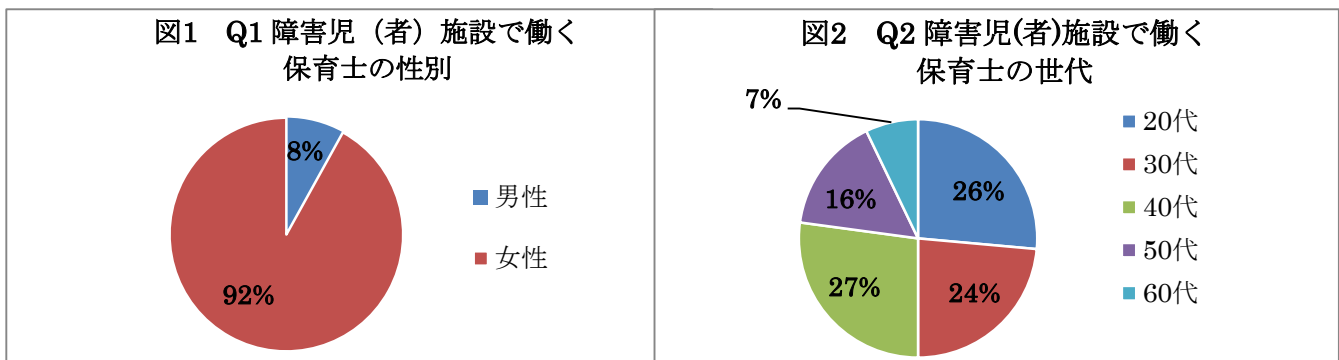


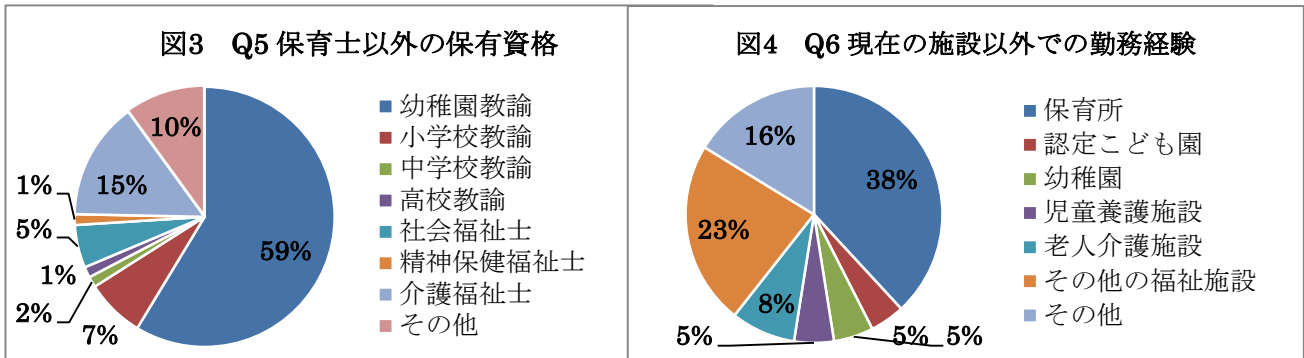
表4 Q3 施設で働く保育士の平均勤続年数

施設職員の平均勤続年数	
調査対象保育士 平均	8.4年
障害児施設 平均	7.7年
障害者施設 平均	9.1年
全国の保育士 平均(厚生労働省調べ)	7.6年

- ・保育士以外の資格では、幼稚園教諭免許だけでなく、様々な資格を保有していることがわかった

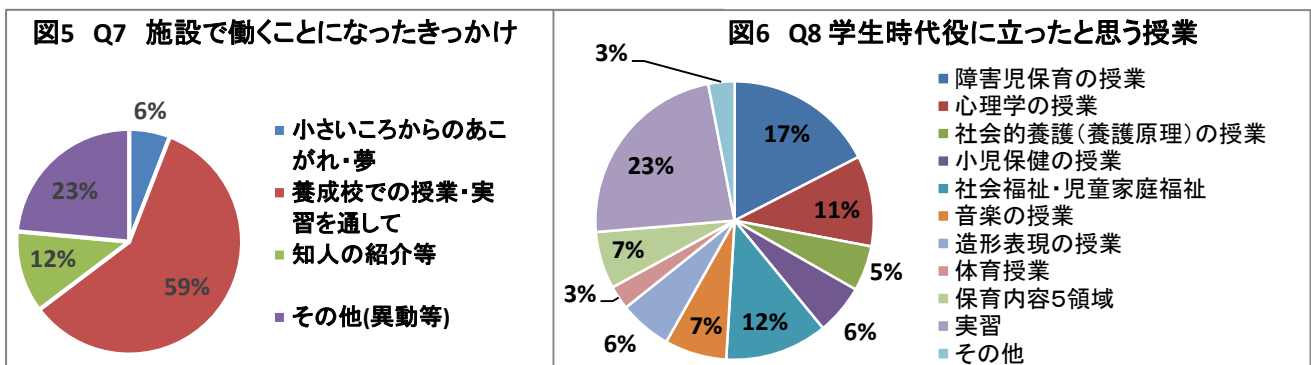
(Q5 より)

・施設以外の勤務経験からは、保育所と同じぐらいの割合で様々な福祉施設での勤務が多いことがわかった(Q6 より)



・「養成校での授業・実習を通して」という回答と「その他」として、法人内の異動という回答が多かった。一方、「小さいころからの夢であった」という回答は非常に少なかった(Q7 より)

・学生時代の授業で役に立ったと思う授業の回答では、様々な授業に分散していたが、特筆すべき事項として、音楽や造形表現は他の授業と同じくらいであるが、体育は全体の中でも少なかった(Q8 より)



自由記述では、施設で働くために必要な力(専門性)とは何か尋ねたところ、いろいろなフレーズがあり、以下の表5のように共通したキーワードに分類することが出来た。

表5 Q16 施設で働く保育士の専門性(自由記述からキーワードを分類)

順位	キーワード	個数	順位	キーワード	個数
1	寄り添う	15	6	受容・共感	5
2	コミュニケーション	12	7	協調	4
3	社会性	11	8	意欲	3
4	人間性	9	9	信頼	3
5	愛(情)	8	10	人権の尊重	2

これらの結果から、大学での講義は、どれも施設で働く保育士の知識として必要であり、実習は、働くきっかけにつながる。そして、施設で働く保育士が考える専門性とは、専門的な知識・技術が第一ではなく、人が人と関わる中でつながる力、思いやる心、愛情や意欲などの“人間性”が重要であると考えていることが分かる。

5. 調査研究に基づく提言

今回フィールドワーク研究を通して提言したいことは、施設で働く保育士の専門性は特別なことではないということである。私たちは、専門性を高めるために保育士養成の講義、具体的には保育の知識・技術の習得のための学びの他、施設で働く保育士の考える人間性を高められるような、日常生活を送ることが大切である。つまり、保育者自身のプライベートの充実や自己実現を達成することがより良い保育に繋がっていくのではないかと考える。

保育士をめざす人は、人間性を磨き、専門性を学び続けることが重要だと分かった。

6. 課題解決策の自己評価

フィールドワーク研究を終えた感想を以下のようにまとめた(抜粋)。

施設は、最初の印象とは違い、大きな家みたいで、保育士は一人ひとりの個性を尊重していて、素敵だった。人数が、多くても私たちと同じような日常の生活であった。
児童発達支援センターの保育は、年齢によるクラス分けではなく、活動や障害の状態に応じた保育内容で、いろいろな工夫がされていたのがすごく勉強になった。スヌーズレンやプレイセラピーの部屋などの物理的な環境は違うところもあるが、障害を持つ子どもの保育所っていう感じだった。
施設の保育士は、他職種との連携や関係機関との連携が多く、保育所保育士との違いを感じることができて、とても勉強になり、楽しかった。保育士と利用者の雰囲気がとても明るかったのが印象的であった。
保育士の仕事が、カッコいい仕事だと改めて感じた。障害児に様々な療育を行い、保育所の保育士とは違ったやりがいを感じた。保育士の対象が、乳幼児だけではなく、18歳未満の子どもや大人も対象としていて、発達を学ぶことが大事だと改めて感じた。
入所施設で働く保育士は、24時間の交代勤務で大変そうだったけど、生活を支えることはやりがいが感じられた。障害者施設の立地環境は、自然が豊かで、伸び伸びと過ごせる施設だと思った。
実際に障害児(者)施設に行ってみて、障害を持つ人を見る目が変わったし、保育士の仕事は色々なところで働けることを知って、フィールドワークに行き行って本当によかった。
医療型障害児施設では、ベッドに寝た状態でもできる遊びや活動もしていて、これまで考えたことがなかった保育内容だった。フィールドワークを通して、保育士の印象が変わった。障害を支えるって、専門性があることを感じたし、“プロ”だなんて感動した。
保育士と利用者の会話が楽しそうで、家庭的な温かさが感じられたな。施設のレクリエーション活動が、楽しく、普通であたりまえの生活だった。これから就職先の一つに考えてみようと思った。

以上のことから、すべての学生が今回のフィールドワーク研究に高い満足を得ていることが分かり、自己評価は大変高く大成功だったことが言える。

今後の課題は、研究結果とリーフレットを活用し、施設で働く保育士の現状と課題を発信していくこと、アンケート調査で分析・考察しきれなかったデータを引き続き研究すること、そして自ら人間性と専門性を磨き・学び続けることだと考える。

参考文献

1. 社会福祉法人富山県社会福祉協議会
<https://www.toyama-shakyo.or.jp/wp/wp-content/uploads/d-30shisetsuichiran-03jidou.pdf>(2019年1月10日確認)
2. 辰己隆, 波田埜英治 2018 「保育士をめざす人の社会的養護」 みらい
3. 立花直樹, 安田誠人, 波田埜英治 2017 「保育実践を深める相談援助・相談支援」 晃洋書房